

洪水に沈んだ1400年前の村

郡家遺跡第83次発掘調査 現地説明会資料
2007.5.27 神戸市教育委員会

郡家遺跡の発掘調査

東灘区の御影 一帯には、今から1900～1400年前ころを中心に栄えた集落の遺跡が存在することが以前から知られていました。遺跡の名は郡家遺跡。初めて発掘調査が行われたのはもう30年近くも前のことで、今回の調査は最初の調査から数えて83回目になります。

これまでの調査で、この地に人が残した最も古い痕跡は、はるか1万年以上も前の縄文時代であり、それ以降徐々に集落として発展して1900～1400年前ころの

弥生時代後期から古墳時代後期にもっとも繁栄したことがわかりました。

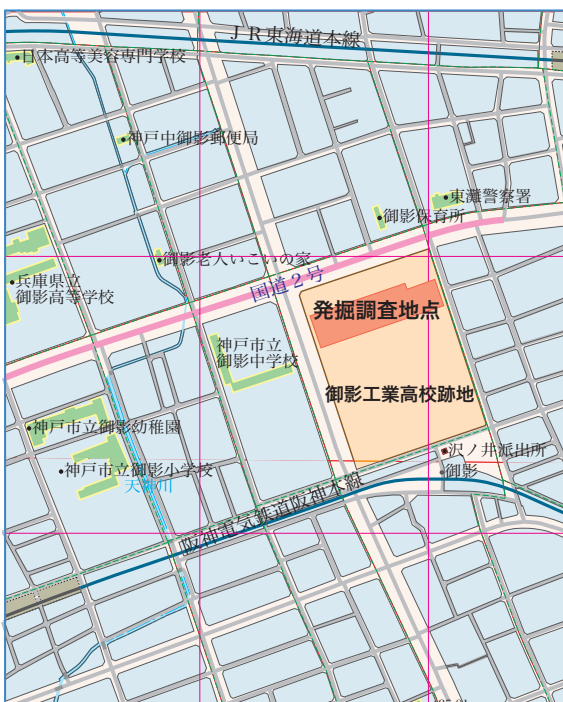
この時代の遺構が一番多く見つかっていますが、奈良時代・平安時代といったその後の時代の遺構も見つかっています。また「郡家(ぐんげ)」の地名が示すように、奈良時代の郡役所＝郡衙の跡地ではないかと推測されていますが、今のところ、それを裏付ける発見はなく、地名の由来は謎のまま残されています。

今回の調査成果

今回の発掘調査では、1700～1400年前ころの集落の一部が確認されました。

発見されたのは村の水田地帯に当たる部分と、水田に水を引き込むための水路、そしてなにか呪術的な場ではないかと考えられる多量の土器が納められた浅い穴や溝、そして竪穴建物などです。

これらの遺構は、すべて洪水の土砂におおわれていました。1400年前のある日洪水が襲い、運ばれてきた砂が層となって残されたのです。水路の中からは多量の土器が出土しており、洪水がおこったとき調査地の東側にあった家屋の多くも洪水で流されてきたと推測されます。



発掘調査地点の位置



砂でおおわれた水田

今回の調査地の西側部分で、古墳時代中期の水田跡が発見されました。多角形の20㎡程度の小さな区画が連なる水田は、厚い砂でおおわれており、洪水で一瞬のうちに水没したと考えられます。

水辺のまつり -古墳時代前期・中期-



古代人がなんらかの呪術的な行為をおこなった痕跡が8か所発見されました。高杯(たかつき) や小型壺といった、お供え物をいれた土器を大地にうがつた穴の中に納め、そのあとわざと大きな石を投げ込んで土器を破壊したようです。これらの祭祀は、水路のすぐ側で行われていることから、水田に豊穰(ほうじょう)をもたらす水路への捧(ささ)げものと考えられます。

豊穰をもたらす大水路

-古墳時代中期-

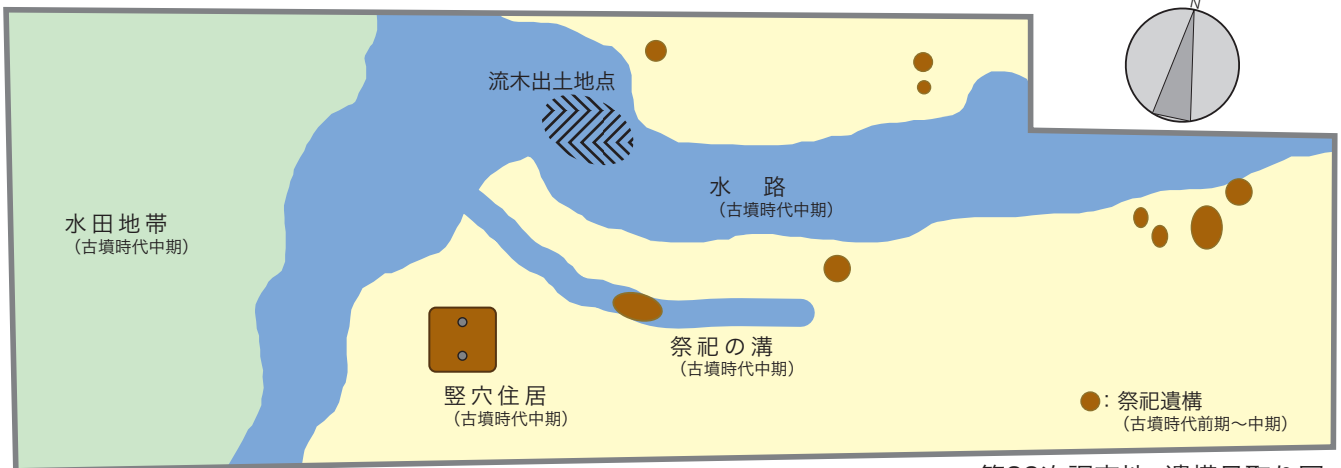
調査地を東西に貫く幅約8mの大水路は、北に上流があり、ちょうど調査地点で東西に分岐する可能性が高いものです。地層の堆積から見て、調査地全体が、何万年もの大昔にはもともと大きな川だったようです。古墳時代の水路は、この太古の川がもたらした砂層の中に築かれていました。

このことから考えて、この大水路は太古の河川痕のへこんだ地形を利用したものかも知れません。

水路の中からは、洪水に押し流された木がたくさん出土しました。水の量を調整する施設である「せき」の部材の可能性が考えられますが、これからくわしく調査してみなければ、どんなものかはわかりません。



古代の祭祀空間 -古墳時代前期～中期-



第83次調査地 遺構見取り図

- 今回の調査地は、幅約8mの大水路をはさんで、西に水田地帯、東に遺構が点在する空間が発見されました。これら点在する遺構は、竪穴建物以外はすべて、供え物を入れた土器を捧げるための穴や溝など祭祀（さいし＝おまつり）のためのものです。
- 特に目を引くのは、大水路と平行するように曲線を描く溝状の祭祀遺構です。この溝は大水路が造られたのと同じか、わずかに先行する時期に行われた祭祀の跡ですが、大水路に平行して小さな溝を造り、祈りをささげたと考えられます。
- これら祭祀遺構から出土した土器を遺構ごとに見くらべると、古墳時代前期から中期ごろまでの時期差があり、古代人が何度も繰り返し祭祀を行ったことがわかります。
- 逆に、日常生活を感じさせる遺構はほとんど見つかっていません。竪穴建物が1棟見つかっていますが、ここに人が住んでいたのか、それとも祭祀のための建物だったのか、現時点ではまだ解明できていません。ただ、建物の床には、ほかの祭祀遺構とおなじような、捧げものを入れたような土器が残されていました。これは祭祀の痕跡なのか、それとも建物の住人が使っていた食器なのかは、今後解明すべきナゾとして残されました。
- 以上の点から、今回の調査地全体が古代の集落における祭祀空間（おまつりのための神聖な空間）ではないかという可能性が高まっています。大水路をはさんで西に水田地帯・東に神聖な祭祀空間があり、豊穡をもたらす水をたたえた水路に向かって、祈りを捧げる古代人の姿が想像されます。



竖穴建物に残された土器 一古墳時代中期一

今回の調査地では、竖穴建物が1軒だけ発見されました。床の大きさは4.2m×4.2m程度、二本の柱で屋根を支える、とても小さい建物です。床にはたくさんの土器の破片が散乱した状態でしたが、どれも「土師器」と呼ばれる種類の軟質なものです。

「須恵器」と呼ばれる灰色系の硬質な

土器は、ごく小さな破片が2点だけでした。他の祭祀遺構にも見られるように、祭祀用のうつわとして「土師器」をえらんで使うことが多いようですが、この建物は偶然「土師器」だけが残されたのか、それともやはりなにかの祭祀を行ったものなのか、なぞが残ります。

神戸市埋蔵文化財センターで郡家遺跡の出土品に出会えます！

- 開館時間 午前10時から午後5時
(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日 (臨時休館日もあります)
- 入館料 無料

- 交通 市営地下鉄西神中央駅下車
南へ徒歩6分
- 〒655-2273
神戸市西区糀台6丁目1
西神中央公園内
TEL 078-992-0656
FAX 078-992-5201

